

責任と記憶

——ヨナスの倫理思想における不死性概念について——

戸 谷 洋 志

一、はじめに

本稿の主題は、ハンス・ヨナス (Hans Jonas 一九〇三—一九九三) の倫理思想における不死性 (Unsterblichkeit) の概念の意味を明らかにすることである。ヨナスは著『責任という原理…科学技術文明のための倫理学の試み』(一九七九 以下、『責任という原理』) において、未来世代への責任を基礎づけたことで知られているが、その問題設定は『生命の哲学…有機体と自由』(一九七三 以下、『生命の哲学』) で論じられた神話思想のうちすでに現れており、不死性概念はそうした神話思想の中心的な課題として論じられている。先行研究において、こうした不死性概念がヨナスの倫理思想においてどのような役割を果たしているのかは、必ずしも十分に論じられてこなかった。これに対して本稿は、主として『生命の哲

学』を参照しながら、未来世代への責任を説明するうえで不死性が果たす概念的な機能を解明し、それによってヨナスの倫理思想のより体系的な解釈を提示することを目指す。

以下では次のように検討を進めていく。まず、不死性概念をめぐる先行研究を概観し、本稿の問題設定を明確化した上で (二)、『生命の哲学』において不死性が論じられる背景を確認し (三)、そこにおいて不死性が決断の時間性として性格づけられていることを明らかにする (四)。そして、ヨナスによって提示される、こうした不死性を理解可能にするための神話を再構成し (五)、そこから導き出される不死性と責任の概念的な連関を明らかにする (六)。最後に、以上の検討を踏まえた上で、ヨナスの不死性概念のもつ倫理的な含意を考察する (七)。

二、先行研究の概観と問題設定

ヨナスの不死性概念は、『生命の哲学』の第二章として収められた論考「不死性と今日の実存 *Unsterblichkeit und heutige Existenz*」のなかでもっとも中心的に論じられている。この論考はもとと、一九六一年にヨナスがハーバード神学学校主催のインガナル講演で発表した「不死性と現代の気分 *Immortality and the Modern Temper*」(Jonas 1962)をもとにしており、そのヨナス自身によるドイツ語訳である。この論考は、その題名が示す通り、現代社会における不死性概念を主題とするものであるが、その過程でヨナスが神話を創作するという点に大きな特徴がある。

先行研究においてこの論考が言及される際には、その主題である不死性概念よりも、多くの場合にその過程で語られる神話思想に注目が集中する。なぜならその神話は、ヨナスの後年の著作『哲学的探究と形而上学的推測』に収録された論考「アウシュヴィッツ以降の神概念」において再び論じられ、アウシュヴィッツをめぐる問題系へと接続されるからだ。この論考は、ホロコーストとユダヤに関するヨナスの思想が集中的に論じられるほとんど唯一の文献であり、ヨナスの思想の核心に迫る手がかりとして、多くの研究者の関心を惹きつけてきた。そのため「不死性と今日の実存」は、「アウシュヴィッツ以降の神」を読み解くための手がかりとして、いわばその

鍵を解くための資料として参照されることが少なくない。そうした視点から読まれるために、「不死性と今日の実存」が本来主題としていたはずの不死性概念をめぐる議論は後景に退き、その論考におけるヨナスの問題関心はかえって見えにくくなっている。

ヨナスの神話思想を対象とする先行研究には大きく分けて二つの類型がある。第一に、神話を構成する要素を分析・整理し、その構造を再構成するもの (Bongardt 2008, S. 174)、第二に、神話思想が含む倫理学的含意を抽出し、これをヨナスの倫理思想と関連させ、ヨナスの哲学に対する統合的な解釈を提示しようとするものである。第一の類型には、ヨナスがショーレムの宗教思想をどのように受容したのかを分析するもの (Wiese 2008) や、ブルトマンからの批判がもたらした影響の分析も含まれる (兼松 二〇二一、品川 二〇一四)。これに対して第二の類型において多数派を占めるのは、ヨナスの神話思想から人間の神学的な責任を導き出し、その内容を『責任という原理』で論じられた未来世代への責任と比較し、前者を後者によって補完する試みである (Hirsch Hadorn 2000, Wiese 2003)。

本稿の問題関心は第二の類型に属する。しかし、右に述べた背景によって、倫理思想の文脈で神話思想が論じられる際に、不死性の概念が主題的に検討される機会はほとんどない。確かに、「アウシュヴィッツ以降の神概念」では不死性の問題は前景化しない。しか

し、ヨナス自身が同書において不死性を「はるかに広いテーマ」(Jonas 1992, S. 193/九頁)と呼んでいることから、彼にとってそれが無視しても構わないような些末な問題ではないことは明らかである。

先行研究の蓄積によって、ヨナスが神話思想から未来世代への責任を導き出そうとしている、ということはずでに明らかにされている。しかしその神話思想は不死性をめぐる問題から導き出されている。ではその不死性概念は、神話思想に基づく未来世代への責任において、どのような役割を演じているのだろうか。「不死性と今日の実存」を中心的に検討しながら、この問いに取り組むことが、本稿の主題である。

二、『生命の哲学』における不死性をめぐる議論

不死性とは一般に永遠の生命を消極的に表現した概念として用いられる (Friedrich und Michaelis 2013, S. 690)。ただしその概念の形態は一樣ではなく、そこには様々なバリエーションがありえる。ヨナスは『生命の哲学』のなかで、こうした不死性の諸概念を類型化し、現代社会においてこの概念がどのように位置づけられるのかを検討している。ただしそれは、概念そのものの論理的・分析的な検討である以上に、「不死性」という概念の吟味であるとともに私たち自身の吟味でもある」のであり、「死すべき定めについて私たち

が現在どう理解しているか」を明らかにしようとする試みでもある (Jonas 1997, S. 375/四一三頁)。すなわちヨナスは、現代社会において不死性がどのように理解されるのかを明らかにすることで、そこから人間の有限性への今日的な了解を分析しようとするのである。

ヨナスはまず、不死性を経験的なものと超経験的なものに区分する。経験的な不死性とは、私たちが他者とともに生きる世界で、特定の共同体の内部で成立する不死性である。それに対して、超経験的な不死性とは、そうした経験的な世界に先行する、人間存在のアブリアリな構造として理解される不死性である。

経験的な不死性はさらに二つの段階へと区分される。第一の段階は、『不死の名誉』(ibid. S. 376/四一四頁)として語られる不死性である。これは、ある特定の人物がなした偉業が、その人物の死後も共同体の内部で語り継がれ、存続するという事態として説明される。ヨナスによれば、こうした名誉の不死性は、「古代において最も高のものと評価され、高潔な行為の正当な報酬であるだけでなく、高潔な行為の主たる動機でもあるとみなされていた」(ibid. S. 376/四一四頁)のであり、それは「政治的公共性」(ibid. S. 376/四一四頁)が成立するための前提であった。ヨナスが直接言及しているわけではないが、ここで彼の念頭に置かれていたのはハンナ・アーレントが『人間の条件』において論じた古代ギリシャのポリスに

おける不死性概念であると推察される。⁽¹⁾

しかし、ヨナスによればこうした「不死の名誉」は今日においてはもはや期待することができない。なぜなら名誉の不死性は、「私たちの名誉を語り継ぐ人々、つまりは公論に対して、私たちが理性的な仕方でもちうる信頼」(ibid. S. 377/四一四頁)を前提とするが、全体主義国家における歴史修正を始めとして、そうした信頼が失われざるをえない事態が現代社会においてはすでに顕在化しているからである。⁽²⁾

これに対して、経験的な不死性の第二の段階として挙げられるのが、「影響の不死性」(ibid. S. 378/四一六頁)である。すなわちそれは、たとえ名誉が語り継がれることがないのだとしても、ある人間の行為の影響が存続し続けるなら、そこにも不死性を見出すことができるだろう、という考え方だ。影響の不死性は、その共同体において人間がどのように記憶されるか、ということと無関係に成立するため、名誉の不死性よりも信頼することができる、と考えられる。

ところが、影響の不死性も十分な説得力をもっているわけではない。なぜなら、核戦争に代表される地球規模の破局が生じれば、「人間の文化という、行為の影響を保管するものそれ自体が、滅びうる」(ibid. S. 378/四一七頁)からである。ヨナスによれば、現代社会は「人間の存続それ自体が危機にさらされているという地点

にまでいった」(ibid. S. 378-379/四一七頁)のであり、影響の不死性が前提とする共同体そのものが、もはやその前提として機能するだけの安定性と耐久性を持っていないのである。そしてこのことは、影響の不死性だけではなく、名誉の不死性をも成り立たせなくするだろう。名誉を語り継ぐ人間が全員死ねば、名誉もまた失われるからである。したがって、経験的な不死性は今日においてどちらも成り立たないということが明らかになる。

これに対して、こうした経験的な情勢の変化に左右されない不死性として語られるのが、超経験的な不死性である。ヨナスはその具体的なあり方として「来世としての未来における人格の存続」(ibid. S. 379/四一七頁)を挙げる。ここで彼が念頭に置いているのは、カントが『実践理性批判』のなかで述べた、実践理性の要請としての靈魂の不滅に他ならない。ヨナスによれば、この考え方において前提とされているのは、「人間が道德的主体という形而上学的身分をそなえており、したがって、感性的秩序にくわえて道德的ないし叡智的秩序に属している」(ibid. S. 379/四一八頁)ということである。この前提は経験に先行するものであり、したがって経験的な世界がどのような情勢に陥ろうとも、それによって影響を受けることがない。この意味において、超経験的な不死性の概念は経験的なそれよりもより強力である、と思われる。

しかし、ヨナスはこのような考え方にも懐疑を表明する。靈魂の

不滅を論じるカントの理論的な前提に従う限り、経験的な世界は現象に過ぎず、物自体から区別された仮象として捉えられる。それは、「外的世界をまるで劇として、舞台上のお芝居として観察する」(ibid. S. 380/四一九頁)という態度を取ることに等しい。しかし、ヨナスによれば、第二次世界大戦の惨禍はこのような態度を取ることを不可能にした。

私たちがブーヘンヴァルト収容所の写真、瘦せこけた肉体とその歪んだ表情、肉体に加えられた人間性に対する最大の冒瀆に目を向けて恐れおののくとき、私たちはこの現象と真理は何か違ったものだという慰めを拒絶する。私たちは、現象こそが現実であり、ここで現象しているものよりは、現実的なものなどないという恐るべき真理を、まじまじと見つめているのである。(ibid. S. 380/四一九頁)

靈魂の不滅を信じることができるとするには、この世界が仮象に過ぎず、その背後に物自体としての「真理」の領域があると考えられなければならないが、強制収容所の惨劇を目の当たりにするとき、そのような考えは「拒絶」され、この現実こそが真理である、と考へざるをえなくなる。そしてそれは同時に、靈魂の不滅を期待することもまた拒絶される、ということの意味するのである。したがっ

て、超経験的な不死性もまた今日においては成立しない。

四、時間の結晶化

以上のような分析によって、ヨナスは、現代社会において不死性の概念はそもそも信頼を失っている、と述べた上で、右のいずれにも分類されない別の不死性概念の可能性を提示する。ここで彼の立場は複雑だ。一方において、彼は現代社会がもはや不死性の概念を求めていない、と考えている。しかし他方において、彼個人は、不死性によってしか説明することのできない事象がまだ残されていると考えているのである。そうした事象として説明されるのが、次のような体験である。

〈いま〉と〈ここ〉のもつ密度が、不意に結晶が生じるような具合に、決定的な地点で明らかにすることがときおりある。たとえどれほど稀で、どんなに束の間のものであれ、時間的なものが永遠のものに對してもつそのような透明な関係が何らかの形で存在するならば、そのような出来事の〈出来 Sein-Ereignis〉の機会とあり方を指針として役立てて、それを、もはや私たちの自我という実体ではないにしても、私たちの存在においてなお不滅のものへと参入しているもの、したがって、不死性への私たちの参与を表している

るものへの示唆とすることがいえる。(ibid. S. 381-382 / 四二二頁)

ここで述べられる説明は極めて抽象的であり、どのような事態を指しているのか、一見しただけでは理解しがたいものになっているが、その内容は少なくとも次のように整理されうる。すなわち人間は「時間的なもの」の「結晶」化の働きを体験することがある。本来、「時間的なもの」は滅びうるものである。それに対してその結晶化は、滅びうるものが不滅のものになるということの意味する。人間がそうした出来事を体験できるのは、人間が「不滅のものへと参入している」からである。ただしそれは、人間が不滅である、ということの意味するわけではない。人間は滅びゆくものである。しかし、そのような滅びゆくものである人間が、不滅の領域へと関わっているのである。だからこそ人間は、自らが経験する出来事が、その不滅の領域において結晶化することを体験できる。そうしたものとしてみれば説明のできない体験が人間にはある、とヨナスは述べているのである。

それでは、このような体験が喚起されるのはどのような時だろうか。ヨナスによれば、それは「私たちの存在全体が賭けられているような決断の瞬間」(ibid. S. 382 / 四二二頁)である。たとえばその典型例は、前述のような、人類の存続そのものが左右される危機

的な事態である。そうした事態に立ち会うとき、人間は自らの「決断」が決して時間の経過とともに薄れていくものではなく、まるでその瞬間に結晶化し、永遠に保存されるかのように感じる。ヨナスはここに、経験的不死性とも超経験的不死性とも異なる別の新しい不死性の可能性を洞察し、それを概念化することを試みるのである。この不死性の概念化は、人間が「永遠なもの」あるいは「不滅のもの」とどのように関係するのか、という問題に取り組むことを不可避にする。ヨナスはこの問題を神学的な問いとして扱うが、その一方で、神の存在を証明することは論理的に不可能である、という限界を自らに課す。時間の結晶化という仕方では体験される不死性を説明するためには、神の概念を召喚せざるをえないが、しかしそれはあくまでもこの不死性を理解可能にするためではない。こうした観点からヨナスは、あくまでもそうであったかもしれない物語として、実験的に神話を創作するという反時代的な手法を採用するのである。

五、ヨナスの神話

ヨナスは道徳的な決断において人間が体験する不死性を説明するために、宇宙創成譚という形で、神話を創作する。ただし、その目的を満たすために、この神話には一つの条件が課せられる。すなわちその神話は、人間に道徳的な決断が可能であるということ、すな

わち人間が善にも悪にも開かれており、場合によっては人間自身の決断によって人類が絶滅することも起こりうる、ということと両立できなければならぬ、ということだ。

この条件は、単純に神を全知全能の存在として定義することを不可能にする。なぜなら、もしも全知全能の神が存在するならば、その神はこの世界において生じうる悪の生起を回避し、そうした悪は決して生起しないだろうからである。もしもそうであるとしたら、人間にはそもそも悪をなすことは不可能であり、いかなる道徳的な決断にも開かれていないことになり、前述の条件が満たされないことになる。しかし、「ブーヘンヴァルト強制所」や核戦争の脅威に代表されるように、現実には悪が生起しうる。

これに対してヨナスは、この条件を満たす神の概念として、全知全能ではない神、すなわち無力な神という概念を提起し、今日において神の存在が語られうるとしたら、そうしたものでしかありえないと考える。⁽³⁾したがって、神がこの世界をどのように創造し、そしてなぜ無力になったのか、そしてその神との関係のなかでどのようなにして人間は不死性を体験するのか、という問いに対して、首尾一貫した像を与えることが、神話には期待される。

こうした条件を満たすために、ヨナスは神による世界の創造の瞬間を次のように描き出す。

始まりにおいて、私たちには知りようもない選択によって、存在の根拠である神的なもの (göttlicher Grund des Seins) は、生成という偶然と冒険と無限の多様性に身を委ねることを決定した。しかも、それは全面的になされた。すなわち、空間と時間の冒険へ入り込んだとき、神は何一つ自分の要素を残しておかなかった。(ibid. S. 300/四三三頁)

神はあるときこの世界が創造することを「選択」した。それによってこの世界が誕生した。しかし、神によって創造された世界は、「生成という偶然と冒険と無限の多様性」の場であり、神はそこに自らの「身を委ねた」。すなわち、神には世界をコントロールする力がなく、それに対して世界は自分を支配する原理を有している、ということである。神はこの世界を創造したが、しかし創造された世界は、まるで独り歩きするかのようになり、独自の仕方で生成していく。神はその生成に対して何も干渉することができず、この世界に「何一つ自分の要素を残しておかなかった」。言い換えるなら神は世界に対して働きかける力をすべて放棄したのである。⁽⁴⁾

ただしそれは神が死んだことを意味するわけではない。神はこの世界に身を委ねているのであり、あくまでもこの世界に内在している。ヨナスは、そのように神を内在させながら、独自の生成を遂げ

る世界を「神の像」とも呼ぶ。神は世界がこれからどうなっていくかを知らないし、何が起きてもそれに干渉できない。しかし、その世界はやはり神が作り出したものだから、そうした出来事は神の像を刻んでいくことになるのである。⁽⁵⁾

途方もない時間のなかで、あるとき偶然に地球が誕生し、そしてそこに生命が出現する。それは、それまで単調であった宇宙に新しい可能性を切り開くものであり、神によって肯定される出来事だった。生命は長い時間をかけて進化し、多様な生物種が、この世界に多様な可能性を試していった。ヨナスによれば、「進化がもたらす種の区別はすべて、元来の可能性に感覚と行為の様々な可能性を付け加え、それによって、神的な根拠が行う自己経験を豊かにする」(ibid., S. 382/四三六頁)。こうした神話の形象のうちには、ヨナスがユダヤ教から継承してきた、創造説と生命の神聖さという観念が色濃く反映されている、と言える (Wiese 2008, p. 172)。

しかし、そうした生命の進化はあるとき一線を超える。それが人間の誕生である。ヨナスはその意味を次のように述べる。

神の像は、物質的万有によってためらいがちに開始され、人間以前の生命が示す、最初は広く、後にはだんだん狭く、なつてゆく螺旋状の姿で、長らく、未決定なままで形作られていた。その神の像は、この最後の転換によって、また

劇的な運動の加速によって、人間による不確かな管理のもとへ移行する。その結果、神の像は、人間が自分と世界に關して行うことによって——救われる形で、もしくは台無しにされる形で——実現されることになる。(Jonas 1997, S. 383/四三七頁)

なぜ人間の出現によって神の像がその「不確かな管理」のもとに置かれるのだろうか。それは人間が、自由な意志によって行為できる存在であるからであり、それによって善と悪の可能性に開かれているからだ。人間は、一方においてはこの世界で善良な行為をすることもできるが、他方において恐るべき悪を引き起こすこともできる。そしてそうした決断は、つまりどちらを選択したのかということとは、神の像に深く刻み込まれる。そのようにして人間は神の像を「救われる形で、もしくは台無しにする形で」決定する力をもってしているのである。

第二次世界大戦において生じた破局はそうした悪の一つである。神がその生起を妨げなかったのは、神が世界の創造によってすべての力を失い、人間の行為に委ねられていたからにはかならない。

六、行為の不死性と責任

ヨナスはここから、前述のような時間的なものの結晶化としての

人間の不死性を、次のように導き出す。

私たちは作り上げられることも壊すこともできる。治すことも傷つけることもできる。神性を養うことも放棄することもできる。それを完成させることも歪めることもできる。一方の刻印による傷跡は他方の刻印による輝きと同じだけ後世に残る。したがって、私たちの行為の不死性 (Unsterblichkeit der Taten) は虚勢に満ちた自惚れの理由にはならない。むしろ私たちには、私たちの行為の大多数がいかなる傷跡も残さないようにと望む理由のほうがたっぷりであるだろう。しかし、それは認められない。私たちの行為は実際に描線を引いたのであり、それは残るのである。

(ebd., S. 394 / 四三九頁)

ヨナスはここで神話から説明される人間の不死性を「行為の不死性」として性格づけている。それは、世界が「神の像」であり、人間の行為がその像に描線を刻むという点から説明される。もしも人間が悪を生起させれば、それによって神の像には「傷跡」が残される。そして、一度引かれた描線は二度ともとは戻らない。ヨナスはそこに人間の不死性を洞察するのである。

行為の不死性という概念を成り立たせているのは、時間的なもの

であるはずの出来事が、同時に神の像という超時間的なものと連関している、という、二重の時間性に支えられた行為概念である。この世界の内部で起きた出来事は時間の経過とともに滅び、忘れ去られていく。しかし、同時にそれは神の像に刻まれるのであり、時間の経過に抵抗して神に記憶され続ける。だからこそ、道徳的な破局の可能性を前にし、決断を迫られるとき、人間はあたかも永遠に参与しているかのように感じ、時間的なものの結晶化を体験するのである。

このことは、人間が自らの行為に対して引き受けるべき責任もまた、二重の時間性に支えられている、ということを意味する。ヨナスは次のように述べる。

したがって、紆余曲折を経た私たちの考察の終点において、かすかな光のもとで、私たちは人間の二種類の責任を区別することができるだろう。一つは、地上の因果性の尺度に基づく責任であって、それによれば、人間の行為は近い未来ないし遠い未来に影響を及ぼしつつ、最終的にはその未来のうちに消えていく。それに加えて、もう一つの責任は、人間の行為が永遠の領域に参入するという尺度に基づく責任であって、この領域においては人間の行為は決して消え

去りはしない。(ebd., S. 396-397 / 四四三頁)

ヨナスによれば責任は、「地上の因果性の尺度に基づく責任」と、「人間の行為が永遠の領域に参入するという尺度に基づく責任」とに区分される。ここでは便宜的に前者を時間的責任、後者を形而上学的責任と呼ぼう。時間的責任は、ある特定の時間において生じる責任である。しかし時間は過ぎ去るのであり、それによって責任もまたこの世界から消えていく。しかし、それに対して形而上学的責任は、こうした時間の経過に対して抵抗し、永遠に記憶され続ける責任である。

ヨナスはこうした人間の責任の二重性から未来世代への責任を次のように導き出す。

道徳的責任の二つの側面、すなわち、瞬間の形而上学的責任と未来への影響の因果的責任が相互に溶け合っているということが、人類自身によってもたらされた、こんにちの人類の前代未聞の状況である。なぜなら、未来全体が危機に曝されることで、未来の純然たる物理的な保護が形而上学的な関心の次元に突如として押し上げられ、その保護に注意深く賢明に携わることが緊急の超越的な義務とされるからである。(ibid., S. 396 / 四四三頁)

人類の存続が脅かされるということは、「未来全体が危機に曝される」ということを意味する。ここでは、形而上学的責任と時間的責任が「相互に溶け合っている」ことになるが、それ自体が「人類の前代未聞の状況」である。これまでも人類はこの世界で悪を犯してきたが、そうした悪の規模は限定されており、人類全体を脅かすほどのものではなかった。しかし、科学技術の急速な発展によって、その悪は人類全体を脅かすほど強力なものとなった。こうした事態が技術的に可能になることによって、はじめて、形而上学的責任が現実の道徳的な課題として立ち現れるのである。

ここには、後年の『責任という原理』で主題化される未来世代への責任が、この時点でヨナスにとってすでに重要な問題関心として意識されている、ということが示されている。

七、むすびにかえて

以上において本稿は、『生命の哲学』を中心にしながら、ヨナスの行為の不死性という概念の構造を検討してきた。同書において論じられる神話思想には、ヨナスが後年の『責任という原理』において主題化することになる、未来世代への責任の基礎づけという問題設定が先取りされている。それでは、この問題設定において、行為の不死性という概念はどのような理論的機能を果たしているのだろうか。

ヨナスは行為の不死性を、経験的不死性および超経験的不死性から区別する。経験的不死性は、それを保証する共同体の存続を前提とするが、共同体は不死性を持たないために不完全である。一方で超経験的不死性は、現実の世界で起きる出来事を超越しているために、世界における人間の行為と無関係である。それに対して、ヨナスの提唱する行為の不死性は、世界における人間の行為と連関しながら、同時に共同体の変化によっても無効化されない概念に他ならない。

このような概念が未来世代への責任を説明する上で果たす役割とは、忘却に対する抵抗である、と考えることができる。なぜなら、未来世代が自分たちを記憶していかもしれない、と考えることは、現在世代を無責任へと誘惑するからである。事実として、現在世代は未来世代を脅かす力をもつが、しかしそれは、現在世代のせいで苦境に陥った未来世代が、その責任が現在世代にあるということとを記憶している、ということまで保証するわけではない。未来世代は、自分たちが陥っている苦境が先行世代に起因することを忘却し、決して先行世代の責任を追及しないかもしれない。そして、そのうであるとしたら、未来世代を脅かす先行世代は、自らの責任を回避するために、意図的に歴史を改ざんし、自らの行為の影響が後世に残らないよう働きかけるかもしれない。こうした無責任さを回避するためにはまず要求されるのは記憶の継承であるが、記憶は共同体

を前提とし、そして共同体は有限で可変的なのである。だからこそヨナスは、人間による記憶の外部に、神による永遠の記憶を想定し、それによって忘却による無責任さに抗うための足掛かりを据えようとしたのだ。この意味において、忘却の脅威に対する抵抗策は、未来世代への責任を基礎づける上で不可欠の役割を演じている。

しかし、ヨナスはこうした行為の不死性の概念を、『責任という原理』のなかでは用いない。それは、この概念があくまでも神話思想に基づいて説明されたものであり、普遍的な妥当性を志向する責任原理とは両立しないからだ。しかし、行為の不死性という概念を用いない、ということは、この概念によって対応されていた課題、すなわち記憶と忘却をめぐる問題に再び直面することを意味する。

そうであるにもかかわらず、こうした問いに対して、ヨナスは責任原理の思想のなかで明示的な議論を展開していない。

そうであるとしたら、ここに神話思想が責任原理に対して果たす一つの補完的な機能がある、と考えることができる。ただし、神話思想で語られる行為の不死性の概念を、責任原理の問題系へと置き移すことが可能なのか、またその問題系において、この概念がどのように翻訳されるのかは、まだ明らかではない。この問いに取り組むためには、責任原理において前提とされる歴史概念を解明し、それが神話思想と整合しうるかを検討する必要があるだろう。これらを今後の課題として提示しつつ、紙幅の制約のために、本稿はここ

で筆を置く。

※本稿はJSPDS科研費21K12825の助成を受けた研究成果の一部である。

注

※引用は原則として原典から訳出しているが、邦訳が存在するものについてはそれを参照している。また引用における強調は断りがない限りすべて原文に基づく。

- (1) なお、『生命の哲学』の英語版では同論考の冒頭に「for H. A.」と記されている (Jonas 1966, p. 282)。
- (2) ヨナスは『哲学的探究と形而上学的推測』において、スターリンによって独裁されていた時期のソ連において、トロツキーに関する記録がごとく抹消されたという事例を指摘し、そこに現代社会における歴史への不信を見出している (vgl. Jonas 1992, S. 182/四五頁)。
- (3) 「無力な神」という表現は「アウシュヴィッツ以降の神」においてはじめて述べられるが、その発想は基本的には「不死性と今日の実存」においてすでに表れている。
- (4) ヨナスがこうした神の自己放棄の概念を着想した源の一つが、ゲルシヨム・ショールムによるユダヤ神秘主義思想であり、特にルリアのカバラをめぐる研究である。「ここで思い出されるのは、ユダヤの伝承は神の至高性について、公式の教えがそうみえるほどには、一枚岩ではないということだ。現代では、ゲルシヨム・ショールムが新たに光をあてたカバラの強力な底流は、神が世界を生産すると同時にひき

- いれられてたどることになる運命について知っている。ここでは、極めてオリジナルな、しかも正統からはかなりかけ離れた思弁が展開されていて、そのなかに立ち混じれば、私の思弁はまったく孤立しているというわけではないだろう。たとえば私の神話は、根底的にはルリアのカバラのなかの宇宙論の中心概念であるツィムツム (Zimmum) の考えに過ぎない。ツィムツムとは、収縮、退却、自己制限を意味する。世界が存在する余地を作るために、原初の無限なるものは自分自身の中に収斂し、自分の外部に、空虚、無を生起せしめ、そのなかに、また、そこから自分が世界を創造できるようにしたのである」 (Jonas 1992, S. 206/二七頁)。ここでヨナスは、「一六世紀に活躍したイサク・ルリアのカバラにおける「ツィムツム」を自らの神話思想と重ね合わせている。しかし、ヨナスのツィムツム概念の理解はショールムのそれと一致するわけではない。ヴィーゼによれば、ショールムはツィムツムを「神が人間の世界の事象から離れることを含むものとして解釈していない」のであり、むしろ「神の摂理への希望と世界の永遠の再創造と再生への希望を述べると見なしている」。本文で後述するように、ヨナスは無力な神に対して人間が責任を引き受けると考えているが、「ショールムはこれをルリアのカバラの破壊であると感じただろう」 (Wiese 2008, p. 176)。
- (5) クラヴィアは、神が自己放棄によって時間のなかに侵入した、というヨナスの学説に、次のような論理的な矛盾を指摘している。まず、神はそうした自己放棄を決断する以前には、時間のなかに存在していなかった、つまり「非時間的なもの」であった。それに対して、自己放棄の決断は神を非時間的なものから時間的なものへと変えるのであり、その意味でそれは変化である。しかし、そもそも変化は時間的前提にしなければ起こりえないのだから、非時間的なものから時間的な

ものゝくの変化は、非時間的なものがすでに時間的なものとなれば、不可逆性がある。ユングの言（cf. Clavier 2011, p. 311）。

参考文献

- Christian Wiese (2003), "Weltabenteuer Gottes und Heiligkeit des Lebens. Theologische Spekulation und ethische Reflexion in der Philosophie von Hans Jonas", in: Christian Wiese and Eric Jakob (Hg.), *Weiterwohnlichkeit der Welt: Zur Aktualität von Hans Jonas*, Philo Fine Arts, S. 202-222.
- Christian Wiese (2008), "Zionism, the Holocaust, and Judaism in a secular World: New perspectives on Hans Jonas's friendship with Gershom Scholem and Hannah Arendt", in: Hava Tirosh-Samuelson & Christian Wiese (ed.), *The Legacy of Hans Jonas: Judaism and the Phenomenon of Life*, Brill, pp. 159-193.
- Friedrich Kirchner and Carl Michaëlis (2013), *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*, Felix meiner Verlag.
- Gertrude Hirsch Hadorn (2000), *Umwelt, Natur und Moral. Eine Kritik an Hans Jonas*, Vittorio Hösle und Georg Picht, Verlag Karl Alber.
- Hans Jonas (1962), "Immortality and the Modern Temper: The Ingersoll Lecture 1961", in: *The Harvard Theological Review*, 55 (1), 1962, pp. 1-20.
- Hans Jonas (1966), *The Phenomenon of Life. Toward a Philosophical Biology*, Northwestern University Press.
- Hans Jonas (1992), *Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen*, Insel. (= 『トランス・トランス・イン・ヴェスト』 品三)
- 哲學記『法政大学出版局』 二〇〇九年)
- Hans Jonas (1997), *Das Prinzip Leben. Ansätze zu einer philosophischen Biologie*, Suhrkamp. (= 『生命の哲学 有機体と自由』 細見和之・吉本隆弘 法政大学出版局』 二〇〇八年)
- Ian Alexander Moore (2019), "Introduction to the Exchange between Rudolf Bultmann and Hans Jonas: Essay on Immortality", in: *Graduate Faculty Philosophy Journal*, New School for Social Research, 40 (2), pp. 491-498.
- Michael Bongardt (2008), "Immanente Religion oder idealistische Spekulation? Zum Verhältnis von Gott und Mensch im "Gottesbe-griff nach Auschwitz " von Hans Jonas", in: Dietrich Böhrer, Horst Gronke & Bernadette Herrmann (Hg.), *Mensch — Gott — Welt. Philosophie des Lebens, Religionsphilosophie und Metaphysik im Werk von Hans Jonas*, Rombach Druck- und Verlagshaus, S. 173-190.
- Paul Clavier (2011), "Hans Jonas Feeble Theodicy: How on Earth Could God Retire? ", *European Journal for Philosophy of Religion*, 3 (2), pp. 305-322.
- 兼松謙 (二〇一〇)『「モナシ」の神話と「モナシ」の神』
『西日本哲学年報』 西日本哲学会 第一九号 五五-七二頁。
品川哲也 (二〇一四)『神と人間の問題の責任と「概念」は成り立たないか』『倫理学論究』 関西大学倫理学研究会 一 (一) 二一-二二頁。
(ウヤ) 二〇一〇 関西外国語大学)

grande influence sur le monde académique français de l'époque.

Face à la séparation entre « le fini » et « l'infini », selon Wahl, Hegel affirme que la « souffrance » comme « conscience malheureuse » forme la force motrice du développement dialectique de la conscience de soi. Par rapport à cette interprétation wahlienne, Lévinas lui-même considère la « séparation » comme relation entre « le fini » et « Infini » et la définit comme notion central de *Totalité et Infini*, bien qu'il critique à plusieurs reprises la dialectique hégélienne dans son œuvre.

Toutefois, curieux que cela semble-t-il, dans son œuvre Lévinas garde le silence total sur cette interprétation wahlienne malgré l'affinité de leur pensée. Nous devrions donc creuser la cause de ce silence: Levinas n'aurait-il pas pris en compte de l'interprétation wahlienne ?

Pour aborder cette question, nous nous focalisons sur l'analyse de la notion de la « séparation » dans *Totalité et Infini* par comparaison avec la « séparation » hégélienne révélée par Wahl dans *Le Malheur de la conscience dans la philosophie de Hegel*. Après la comparaison de ces notions, nous tenterons de réévaluer l'impact de la lecture wahlienne de Hegel sur la genèse de *Totalité et Infini*, qui n'a jamais été mis en lumière jusqu'à présent.

Responsibility and Memory: On the Concept of Immortality in Jonas's Ethical Thought

Hiroshi TOYA

The subject of this paper is to clarify the meaning of the concept of immortality in the ethical thought of Hans Jonas. Jonas is known for his work, *The Imperative of Responsibility: In Search of an Ethics for the Technological Age* (*Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*), in which he founds the responsibility for future generations, but his problem-setting is already evident in the mythological thought discussed in *The Phenomenon of Life: Toward a Philosophical Biology* (*Das Prinzip Leben. Ansätze zu einer philosophischen Biologie*), where the concept of immortality is discussed as a central issue in such mythological thought. However, in previous studies, the role of immortality in Jonas's ethical thought has not always been sufficiently discussed. From this point of view, this paper aims to elucidate the conceptual function of immortality in explaining the responsibility to future generations, referring mainly to *The Phenomenon of Life*, and thereby provide a more systematic interpretation of Jonas's ethical thought.

In this paper, I will review previous studies on the concept of immortality to clarify the problem of this paper, and then confirm the background to the discussion of immortality in *The Phenomenon of Life*, where immortality is characterized as the temporality of determination. Then, I will reconstruct the mythology presented by Jonas to make such immortality comprehensible and clarify the conceptual link between immortality and responsibility derived from it. In conclusion, based on the above considerations, this paper will be shown that Jonas's concept of immortality, as presented by his mythological thought, functions as a concept that explains resistance to oblivion in the foundation of responsibility to future generations.

The Unity of Virtue in Contemporary Virtue Ethics

Mayumi NISHINO

The unity of virtue thesis, which states that the various virtues only hold different names for the same concept, has a long history of controversy and is among the most debated issues in contemporary virtue ethics. This idea, and especially when interpreted as implying that an individual cannot possess a virtue without possessing all the other virtues, sounds implausible from common experiences. One dominant interpretation is that various virtues originate from the same state of soul, from a sort of perceptual capacity. McDowell, one of the leading advocates for the traditional Aristotelian formulation of the thesis, holds that each virtue is a form of reliable sensitivity to a certain sort of requirement from situations.

This article aims to explore the role of practical wisdom (*phronesis*) upon the unity of virtue (s) in contemporary discussions. By showing how the unity of virtue is compatible with the plurality and diversity of virtues under the direction of practical wisdom, I intend to clarify the issue surrounding the unity of virtue from a new perspective, thereby paving a way toward re-constructing a new foundation for moral education, focusing on moral virtues as an integrated entity, rather than as discrete dispositions.

First, upon more closely examining the conundrums that the unity of virtue thesis poses for virtue ethics, I identify the problems which may put the feasibility of the virtuous person, the central feature of virtue ethics, at stake. Second, I examine the ideas of two main contemporary virtue-ethicists, Russell and Annas, focusing on their views of the nature of practical wisdom and its relation to the virtues as clusters. Third, I indicate the unity as a unified, open whole, in-